

かきもり 柿衛文庫名品にみる 芭蕉－不易と流行と－

公益財団法人柿衛文庫は、岡田家 22 代当主・岡田利兵衛(1892～1982、号は柿衛)が蒐集した俳諧資料をもとに昭和 57 年(1982)に設立されました。文庫名は、江戸時代から岡田家の庭にあった見事な柿を衛るという意味が込められており、同家の当主たちは柿に由来する雅号を持ちました。柿衛翁は、家業である酒造業を継ぎながら、伊丹町長・市長を歴任。さらに郷土伊丹の俳人・上島鬼貫を出発点に、松尾芭蕉をはじめとする俳文学研究に没頭し、多くの俳諧資料を蒐集しました。その充実した蒐集品は、日本三大俳諧コレクションの一つともいわれています。

本展では、柿衛文庫が所蔵する芭蕉の名品を一堂に公開し、芭蕉の俳諧風雅の精神である「不易流行」に迫ります。あわせて飯尾宗祇や松永貞徳、西山宗因、鬼貫など連歌から俳諧に至る作品の数々を展覧します。直筆資料で俳諧の歴史をたどることができる柿衛文庫のコレクションを通して、その豊かで魅力的な俳諧の世界をどうぞお楽しみください。

なお、本展は「みやのまえ文化の郷」一帯の再整備工事に伴い、長期休館中であった令和 3 年(2021)、永青文庫(理事長 細川護熙氏)において開催し、多くの方に柿衛文庫の名品をご紹介する機会を得ました。そして、このたび柿衛文庫を含む 5 施設を統合した市立伊丹ミュージアムにおいて、帰還展として開催いたします。

◆会期 2023 年 1 月 14 日(土)～3 月 5 日(日) ※会期中、一部展示替えを行います。

◆休館日 月曜日

◆開館時間 午前 10 時～午後 6 時(ただし入館は午後 5 時 30 分まで)

◆観覧料 一般 800(700)円 大高生 600(550)円 中小生 450(350)円
※()内は 20 人以上の団体料金
※兵庫県内の小中学生はコロンカード提示にて無料
※伊丹市在住の高齢者割引有(平日 60 歳以上、土日祝 65 歳以上)

◆主催 市立伊丹ミュージアム [伊丹ミュージアム運営共同事業体/伊丹市]

◆主な出品作品(予定) すべて(公財)柿衛文庫蔵、※は伊丹市指定文化財

◎「まこと」を求めて

- ・芭蕉筆 旅路の画卷(三画一軸の内)
- ・芭蕉筆「きさかたの」等四句懐紙
- ・許六筆 百華賦
- ・鬼貫筆「おもしろさ」句短冊
- ・鬼貫筆「によっぽりと」句一行物 ※
- ・素龍筆 柿衛本『おくのほそ道』
- ・芭蕉筆「荒海や・稲の香や」句草稿
- ・芭蕉筆「許六離別詞」懐紙
- ・鬼貫筆「あちらむけ」句画賛 大岡春卜画 小町図
- ・蕪村筆 俳仙群会図 ※

◎「新しみ」を求めて

芭蕉筆蹟の変遷

- ・芭蕉筆「はるやこし」句短冊
- ・芭蕉筆「我富り」句短冊
- ・芭蕉「馬に寝て」句文自画賛 小夜の中山残月図 懐紙
- ・芭蕉筆「ふる池や」句短冊 ※
- ・芭蕉「山吹や」句自画賛 山吹図
- ・芭蕉筆曲水あて書簡 元禄四年十一月十三日付

連歌から俳諧へ

- ・宗祇筆「みるまゝに」句短冊
- ・「水無瀬三吟百韻」懐紙
- ・紹巴出座「懐旧之連歌百韻」懐紙 慶長四年三月六日興行
- ・『大原野千句』
- ・貞徳筆「鳥の名を」句短冊
- ・立圃筆 十八番花月之句合（休息歌仙）
- ・宗因賛 西鶴画「花見西行偃息図」懐紙
- ・西鶴筆「皺箱や」句短冊

◎柿衛翁の生涯と研究

- ・高橋草坪筆「台柿図」
- ・岡田柿衛作「昭和二十三年度入庫品大番附」
- ・岡田利兵衛著『芭蕉の筆蹟』、原稿「文字の個性と分析表」
- ・岡田柿衛筆ノート「私の飼鳥」巻の十

など約 100 点

◆関連イベント

○記念講演会

対談「不易流行」

日 時：2023 年 1 月 15 日（日）午後 2 時～3 時 30 分

会 場：市立伊丹ミュージアム 1 階講座室

登壇者：川上宗雪宗匠（江戸千家家元）

坪内稔典（市立伊丹ミュージアム名誉館長・柿衛文庫理事長）

定員等：100 名（要申込み・先着順）

聴講料：一般 2,000 円、大高生・柿衛文庫友の会会員 1,500 円

申込み：お電話(072-772-5959)にてお申込みください。

○関連講座

対談「柿衛文庫の名品について」

日 時：2023 年 2 月 23 日（木祝）午後 2 時～3 時 30 分

会 場：市立伊丹ミュージアム 1 階講座室

登壇者：尾崎千佳氏（山口大学准教授）

辻村尚子氏（大手前大学准教授）

定員等：100名(要申込み・先着順)

聴講料：一般 1,500 円、大高生・柿衛文庫友の会会員 1,000 円

申込み：お電話(072-772-5959)にてお申込みください。

展覧会や関連イベントの開催について、新型コロナウイルス感染拡大状況等により見合わせる場合がございます。最新情報は、市立伊丹ミュージアムの公式サイト <https://itami-im.jp/> にてご確認いただきますようお願いいたします

【展覧会に関するお問合せ先】

市立伊丹ミュージアム

〒664-0895 兵庫県伊丹市宮ノ前 2-5-20

直通：TEL 072-772-7447、FAX 072-781-9090

担当：市立伊丹ミュージアム・

公益財団法人柿衛文庫 学芸員 加藤有果子

Mail：katou@kakimori.jp

◆特別展「柿衛^{かきもり}文庫名品にみる 芭蕉－不易と流行と－」主な出品作品紹介

◎「まこと」を求めて

芭蕉は『おくのほそ道』の旅において「不易流行」の理念に目覚め、俳諧のみならず芸術全般に通底する本質的な真理「風雅の実(まこと)」に到達しました。本章では、芭蕉やその弟子たち、伊丹が生んだ俳人・上島鬼貫^{おにづら}などの作品を通して、彼らが追い求めた時代を超えても変わらぬ「まこと」に迫ります。

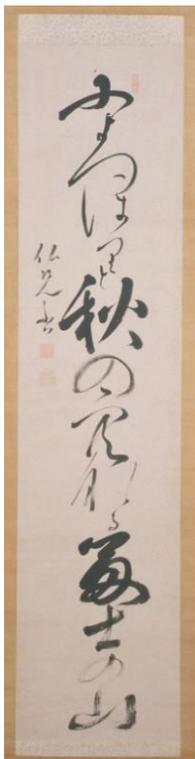


①芭蕉筆「旅路の画卷（三画一軸の内）」より「初冬旅」（公益財団法人 柿衛文庫蔵）

旅の詩人と呼ばれる芭蕉が多くの旅の中から印象深い十場面を取り上げて描いた画卷。最晩年の画であり、芭蕉の旅についての思想を示す資料としても貴重。

②芭蕉筆「荒海^{あらうみ}や・稲^{いね}の香^かや」句草稿（公益財団法人 柿衛文庫蔵）

『おくのほそ道』の旅中に書かれた草稿。「稲の香や」の句は、のちに「早稲^{わせ}の香や」と改められるが、発想の瞬間は「稲の香や」であったことが本点によって知られる。



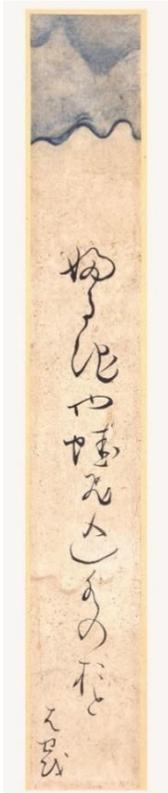
③鬼貫筆「によっぽりと」句一行物^{いちぎょうもの}（公益財団法人 柿衛文庫蔵）

芭蕉とほぼ同時代に活躍した伊丹の俳人・鬼貫の書。本点のように句を一行で大きく書いたものを「一行物」といい、俳人では鬼貫が最初だとされる。

◎「新しみ」を求めて

芭蕉は、それまで俗文学と位置付けられていた俳諧を芸術の次元まで高め、時代とともに変化流行する「新しみ」を求めながら、生涯にわたり俳諧を深化させ続けました。こうした芭蕉の俳諧の変遷を筆蹟という新しい角度から捉えたのが岡田柿衛翁です。本章では、柿衛翁の研究に基づき、芭蕉の青年期から晩年期に至るまでの筆蹟の変化とともに、作品にみる「新しみ」を紹介します。

<芭蕉筆蹟の変遷>



④芭蕉筆「ふる池や」句短冊（公益財団法人 柿衛文庫蔵）

「ふる池や蛙 ^{かわずとびこむ}飛込水のおと」は、貞享3年(1686)の春、芭蕉庵において催された『蛙合 ^{かわずあわせ}』の巻頭句で、芭蕉開眼の句として知られる。伝存する同句の短冊の中で最も優れた筆蹟とされる。

⑤芭蕉筆「山吹や」句自画賛 山吹図

（公益財団法人 柿衛文庫蔵）

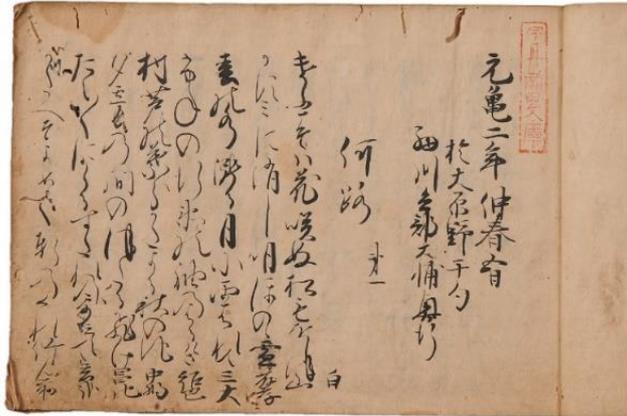
芭蕉が好んだ一重の山吹の画に句を添えた自画賛。

「山吹や宇治の焙炉 ^{ほいろ}のほふ時」は嗅覚と視覚を呼び覚ます生動感にあふれた名句。芭蕉が「自画」と署名した作品は極めて少なく貴重。



<連歌から俳諧へ>

連歌は、二人の唱和で一首とする短連歌に始まり、やがて二人以上で交互に長く続ける長連歌に発達しました。貴族や武将たちに好まれ、室町時代、和歌や古典にも精通した連歌師・飯尾宗祇が大成させます。江戸時代に入ると、連歌の雅に対し、俗を特性とする俳諧が文芸として確立。なかでも言葉遊びの要素が強い松永貞徳の俳諧が庶民に受け入れられ、全国に広がりました。その後、西山宗因を中心とする俳諧が、より大胆奔放な表現方法によって台頭します。芭蕉は、はじめ貞徳門の俳諧を学びますが、江戸に出て宗因の新風に心酔。俳諧宗匠として立ったのち深川に隠棲し、幾度かの旅を通して「不易流行」の芸術観を説き、俳諧を芸術の域にまで高めました。



⑥『大原野千句』（公益財団法人 柿衛文庫蔵）

元龜2年(1571)2月5日から7日、洛西大原野の勝持寺で催された千句連歌^{れんが}を写した本。主催は細川家初代の細川藤孝^{ふじたか ゆうさい}(幽齋)。



⑦宗因賛 西鶴画「花見西行偃息図」懐紙（公益財団法人 柿衛文庫蔵）

句は宗因(梅翁)、画は西鶴が描いた師弟合作の作品。

西行の歌「ながむとて花にもいたく馴れぬれば散る別れこそかなしかりけれ」の上の句を用い、「ながむとて花にもいたし首の骨」と花を眺めすぎて首を痛めたと笑いに転じる。雅な世界を俗の世界に急展開させた談林的手法で人気の高い代表句。

◎ 柿衛翁の生涯と研究

岡田利兵衛(号・柿衛)は明治 25 年(1892)伊丹に生まれ、京都帝国大学を卒業後、江戸時代から続く酒造業を継ぐ傍ら伊丹町長・市長を務め、聖心女子大学などで教鞭をとるとともに俳文学の研究に没頭しました。

その出発点は先祖と交流のあった俳人・上島鬼貫であり、最も重要な研究テーマは芭蕉でした。なかでも自ら芭蕉の真蹟を収集して著した『芭蕉の筆蹟』は文部大臣賞を受賞し、芭蕉筆蹟学の礎を築きました。柿衛翁は昭和 57 年(1982)に伊丹で没しましたが、収集した俳諧資料は同年に設立された柿衛文庫に受け継がれています。



岡田柿衛翁 書斎にて



⑧高橋草坪筆「台柿図」(公益財団法人 柿衛文庫蔵)

文政 12 年(1829)、頼山陽らいざんように同行して伊丹を訪れた高橋草坪が描いた岡田家ゆかりの台柿図。柿衛翁は第二次世界大戦末期の空襲下に防空壕に持って入るほど本点を大切にしていた。

①～⑧の作品画像データをご希望の方は、市立伊丹ミュージアム・(公財)柿衛文庫 学芸員 加藤 [katou@kakimori.jp] までメールにてお申し越してください。